ニット・ファイル通信

ニットを学ぶ！

ヒット曲「世界に一つだけの花」が
示唆するもの

「ＪＢＫＳ2015」精鋭29社が
日本の良さを発信

あざみ起毛とは、本当は間違いだった
あまり知られていなかった「起毛」に関するお話

ボンジュール「国際ランジェリー展」

今は懐かしい1950年代の各産地
第13回富山・石川

『ニットってええんちゃうん!?』

季刊誌　Vol.19
2016　4月号
ニット・ファイル社発行

「あざみ起毛」とは、本当は間違いだった

～あまり知られていなかった「起毛」に関するお話～

左（チーゼル）右（アザミ）

「アザミ起毛」と云う業界用語は、果たして正しいのか、それとも間違いなのか――。

その解明作業は、読者からの一本の電話から始まったのでした。

現在、衣料小売店頭ではニットや織物ともに、起毛したヘアリーな商品人気が再燃しつつあり、中でもニット業界では起毛加工への要請、ニーズが大幅に増えています。この起毛加工技術には「アザミ起毛」と「スチール起毛」があるとされていますが、今回ここで取り上げるのは「アザミ起毛」です。

ところがこれまで通常、「アザミ起毛」と呼ばれていたものが、呼称間違いだったのだとの「疑義」が持ち上がったのです。本当は「チーゼル起毛」が「正式名称なのだ」と云うのです。

起毛加工機

昔から馴染みのあった「アザミ起毛」と云う名称ですが、実は、「アザミ」と「チーゼル」は全く違うもので「アザミ」では起毛加工は絶対に出来ないとの話なのです。筆者も「何故?」と云う疑問に駆られ、JIS規格・百科辞典・繊維系用語辞典を始め、インターネットに掲載されている全ての資料や、小社がストックしていた資料等を調べても、繊維業界の用語「アザミ起毛」と記されたものばかり。古くから

「あざみ起毛」は間違い

繊維業界では「アザミ起毛」と云う、誤った名称が認知され、定着していた実態を再確認した形となりました。

具体例としては、アザミ（薊）起毛機＝teaser raising machineと表記されていたり、これに類する記述が多数派。しかし実際のところ、「アザミの実」による起毛加工は、横編や丸編のニット製品やニットテキスタイルも含め、１００％出来ないのです。アザミのトゲは、サボテンのトゲと同じレベルの細い針であり、これでは編地や生地の起毛加工に使用する事は不可能なのです。念のためインターネットを検索してみると、「チーゼルと云う名前のアザミ」とか、「アザミを乾燥させたチーゼル」などの表記がほとんどです。繰り返しになりますが、「Tease」＝チーゼル」は、イコール「アザミ」では無く、この点、繊維業界人の多くが、間違った解釈を鵜呑みにしていたと云う事になります。このような間違いに象徴される通り、日本のＪＩＳ規格を始め、著名出版各社の百科辞典までが誤った解釈をそのまま引用（それをまたインターネットでもアップ）しているところから、その影響は大きく、毛布メーカーや紡績メーカー、大手アパレルなどにおいても、かなりの頻度で間違った解釈が用いられてきたようです。

そこで今回を良い機会と捉え、業界的間違いや誤った解釈を正すべく、起毛加工もしておられる専門業者さんから詳しく教えて頂きました。

まず、「薊（アザミ）」は、キク科に属する1年草（品種により多年草も有る）の植物で、タンポポと同じように、花が咲き終わり乾燥すると種袋が炸裂し、中から落下傘のような状態で種子を放出し、辺り一面に撒き散らします。写真①から③が、「薊」の中で最もトゲの多いアメリカオニアザミの種が出来るまでを例にとって分かり易く表示したものです。

①アメリカオニアザミの花

②アメリカオニアザミやや種化

③アメリカオニアザミ完全種化

一方、「チーゼル」とはヨーロッパが原産のマツムシソウ科の2年草。草丈1～2メートルになる大型草で約15種類の品種があるようです。和名は「オニ

「あざみ起毛」は間違い

ナベナ」と云い、一名「羅紗(ラシャ)掻き草」とも。まさに羅紗(織物)を掻く草の意味です。

その中でフラーズチーゼル(Fullers Teasel)、別名サティウス(Dipsacus Sativus)、及び和名ラシャカキソウ(羅紗掻草)という太く曲がったトゲがある品種だけが、起毛加工に使用する事が出来ます。似た品種でフロヌム(Dipsavus Fullonum)という品種もありますが、これもアメリカオニアザミと同じ細い直毛のトゲであるため、起毛加工には使用する事が出来ません。

左(フラーズチーゼル)中(フロヌム)右(アザミ)

また、アザミは英語でThistle(シースル)、またはサーシアム(Cisium)と云うため、昔の人がThistle(シースル)とチーゼル(tease)とが実に紛らわしいので、うっかりして読み間違えたのではないか・・・と云うのが真相のようです。

マツムシソウ属の標準属:チーゼルは一般的なオニナベナに類似しており、同様に使用されるアザミとチーゼルは違う植物です。このように今まで「起毛はアザミを用いていた」と思っている方が多いようですが、それは明らかに「違います」。正しくはフラーズチーゼルなのです。また起毛機の名称であるTEASER(RAISING MACHINE)も間違いでして、正確な記述名は、TEASEL(RAISING MACHINE)なのです。このように起毛加工に使えるのは、「フラーズチーゼル」の1種類だけなのです。因みに「現代繊維辞典」(センイ・ジャアナル刊・初版は昭和40年5月15日)で「あざみ」の項目を調べると、次のような解説文がありました。

「薊、Teasel、Teazle」は起毛機に使う資材「主としてオニナベナの実=Thistle」。原産地は欧州であるが、現在は大阪府堺市近辺で少しだが栽培されていると聞く。太さによって、トップチーゼル(39〜42mm)、キングチーゼル(35mm以上)、メールチーゼル(35mm以下)に分けられる――との説明です。しかも「オニナベナの実」が英文ではThistle(あざみ)と表記されていました。本来は「オニナベナの実はFruit of the teazel」になるべきで、これは間違った表記です。

なお、間違った表記も問題ですが、それと併せてさらに深刻な問題は、この「チーゼル」が地球の生態系から消へ行く植物、絶滅種になろうとしている現実です。高級毛織物を毛羽立てて素晴らしい風合いを出すのに利用され、特に堺の近辺や泉州地区一帯で盛んに栽培されていたのですが、織物産業の衰退に伴いこの植物も、運命を共にしつつあるのです。

(写真・資料提供=㈱ニットマテリアル)